歯肉に発症した腫瘍形成性白血病の1例

辻 龍雄・早津良和・前田寛治
井上 敬・佐々木功典*・篠崎文彦

A case of tumor forming leukemia in gingiva

Tatsuo TSUJI・Yoshikazu HAYATSU・Kanji MAEDA
Takashi INOUE・Kohsuke SASAKI*・Fumihiko SHINOZAKI

Key words: leukemia(白血病), leukemic cell infiltration(白血病細胞歯肉浸潤), gingival tumor(歯肉腫瘍)

はじめに

白血病患者は、歯肉出血や歯肉腫脹をきたすことが多く、そうした口腔所見は、白血病の初期診断として注目されている^{1,2)}。今回、われわれは、急性骨髄性白血病患者で上顎臼歯部歯肉に腫瘍様に著明な歯肉増殖をきたした症例を経験したので、その概要を報告する。

症 例

患 者：54歳 男性。

初診日：平成2年11月■日。

主 訴：左側上顎歯肉腫脹。

家族歴：特記事項なし。

既往歴：昭和63年11月心筋梗塞。

現病歴：平成元年10月、急性骨髄性白血病(SAB 分類 M2)を発症し、本院第3内科において化学療法を受け、緩解を得た。同じ頃に、上顎右側臼歯部の歯肉腫大があったが、化学療法後に消失した。平成2年10月下旬より、上顎左側臼歯部に歯肉腫脹をきたすようになり、平成2年11月■日、当科を紹介され来科した。歯周炎による炎症性の歯肉腫脹と診断し、第3内科入院後に原因

写真1 初診時の口腔内写真

歯の抜歯を行う予定とした。同年12月■日、第3内科へ入院し、12月■日に当科に再来した。

現 症：身長165 cm、体重47 kg、栄養状態不良。顔面は左右対称で、左右顎下および左右頸部リンパ節の腫脹は認めなかった。口腔内所見では、左側上顎犬歯から臼歯部の歯肉に境界明瞭な歯肉腫脹を認めた(写真1)。腫脹部の大きさは5×3 cmで、歯列に沿った上皮表面の一部は潰瘍化しており、易出血性で、硬度は硬かった。腫瘍内の歯牙は動揺が著明であった。

X線所見：X線所見では、左側上顎臼歯部の歯槽骨に高度な骨吸収がみられたが、上顎洞前壁や上顎洞底部の骨破壊像はみられなかった。

臨床検査所見：赤血球数 $373 \times 10^4/\text{mm}^3$ 、白血球数 $6,200/\text{mm}^3$ 、血小板 $2.6 \times 10^4/\text{mm}^3$ 、血清蛋白 6.8 g/ml 、血糖値 87 mg/ml 、アルブミン 3.0 g/ml 、GOT 6U、GPT 10U、 γ -GTP 21U、ALP 17U、LDH 120U、尿酸値 5 mg/ml 、クレアチニン 1.0 mg/ml で、血小板減少がみられた。

山口大学医学部歯科口腔外科学教室
(主任：篠崎文彦教授)

* 岩手医科大学医学部病理学第1教室
(主任：佐々木功典教授)

Department of Oral and Maxillofacial Surgery,
Yamaguchi University School of Medicine
(Chief: Prof. Fumihiko Shinozaki)

* 1st Department of Pathology, Iwate Medical
College School of Medicine (Chief: Prof. Kohsuke Sasaki)

受付日：平成3年3月13日

写真 2 病理組織像 (H-E 染色, 100倍)

写真 3 病理組織像 (H-E 染色, 200倍)

病理組織所見：上皮下には、浅部から深部にかけて広範囲にわたりきわめて高度な白血病細胞の浸潤がみられる(写真2)。白血病細胞は、単球もしくは顆粒球系の芽細胞に類似している(写真3)。

診 断：白血病細胞歯肉浸潤。

処置および経過：初診より約1か月後の再来時には、上顎左側歯肉腫脹は著明に増大していた。生検を行ったところ、白血病細胞歯肉浸潤と診断された。第3内科において、平成2年12月■日より、シタラビン1日量5gを4日間連続経静脈的に投与、メトトレキサート1日量17mgを2日目より3日間経静脈的に投与、これを1クールとして治療が行われた。1クール終了後の平成3年1月■日の受診時には、歯肉腫脹は著明に縮小した。しかしながら、化学療法後に白血球数 $1,000/\text{mm}^3$ 、赤血球数 $222 \times 10^4/\text{mm}^3$ と、血液状態が著明に悪化し、1月■日、敗血症性ショックを発症し、翌日に死亡した。

考 察

白血病患者にみられる歯肉肥大や歯肉腫脹は、白血病患者の中でも単球由来の白血病に多く、白血病による出血傾向と口腔衛生状態の悪化などによる局所的因子が加わって炎症性の過形成をきたし歯肉肥大を呈する場合と、白血病細胞の歯肉軟組織への浸潤によるものがある¹⁾。白血病細胞浸潤により腫瘍形成した場合、腫瘍形成性白血病³⁻⁵⁾と呼ぶ。

腫瘍形成性白血病は、一般に肉眼的に鑑別し得る組織塊あるいは組織結節とされ、周囲と明瞭に境界される細胞増殖性腫瘍と、白血病細胞の著しい浸潤増殖による腫

瘍とがある^{4,5)}。本症例は、歯肉上皮下に著明な白血病細胞の浸潤増殖をみた結節性腫瘍の症例であった。本邦における腫瘍形成性白血病の発生頻度は、急性白血病で9.6% (13/135)、慢性白血病で17.2% (5/33) といわれ、発生部位は、縦隔、皮膚、骨などに多く、歯肉での報告はまれである⁵⁾。腫瘍形成の要因はあきらかではないが、腫瘍形成後には腫瘍発現前とは異なる大型の白血病細胞が認められることがあることから、白血病細胞側の因子が考えられている⁵⁾。

結 語

歯肉に著明な結節状の腫瘍形成をきたした急性骨髄性白血病の1例を、若干の文献的考察とともに報告した。

引 用 文 献

- 1) Regezi, J.A. and Sciubba, J.J.: Oral Pathology; Clinical-Pathologic Correlations, 1st ed. Saunders Co., Philadelphia, 1989, p 149, p 190, p 509.
- 2) Stanford, R., Sonis, S., et al.: Oral pathoses as diagnostic indicators in leukemia. Oral Surg 50: 134-139 1980.
- 3) 阿部広幸, 荻野経子, 他: 上顎洞の腫瘍形成を初期病変とした小児急性リンパ性白血病の1例. 日口外誌 37: 168-174 1991.
- 4) 名尾良憲, 村上義次: 腫瘍形成性白血病. 診療 22: 764-770 1969.
- 5) 栗田宗次: 腫瘍形成性白血病について. 臨床血液 23: 433-440 1982.